

本を選ぶ

NO.422 2020年(令和2年)7月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央5-20-1 TEL=048-432-3726

- <ろん・ぼわん> 荻窪 Titleより (2の1)
- 東京文化会館 音楽資料室を訪ねて
- 心の何処かで私を支える本
- 図書館を離れて (第47回)
- 鳥の目 79

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

荻窪 Titleより (2の1)

緊急事態宣言が解除され、街に少しずつ平穏さが戻ってくると、この間書店も大変だったでしょうねと労りのことばをかけてもらうことが増えた。東京都の新刊書店は休業要請の対象ではなかった。店を開けるかどうかの判断は個々の店に任されており、大変さの内容は店により異なる。出版社や取次店の人に話を聞いてみると、緊急事態宣言の間も開けていた店は売上をかなり伸ばし、臨時休業を余儀なくされた店の減少分をある程度カバーしたので、全体として「傷は浅くてすんだ」とのことであった。

しかしいくら売上が伸びたといっても、その店の経営者やスタッフの気苦労、本当に店を開けてよいのかという逡巡は想像がつく。ウィルスに対する意識は人それぞれで、そのことが普段は隠されている人と人との分断を明らかにし、この間摩擦を生んでいた(わたしの店でも客同士の言い争いがあった)。かといって長く店を閉めてしまえば、明日の家賃が払えないという切実な状況が待ち構え、そして何より、目のまえの本を求めらるお客さんに、その本を渡すことができないというジレンマも抱えることになる……。

わたしの店は、緊急事態宣言が出た翌日の4月8日から臨時休業にした(5月11日より短縮営業で再開、併設のカフェは5月末まで休み)。店は

杉並区の荻窪駅から歩いて10分ほどの住宅地にあり、不要不急の外出が要請されはじめた3月以降、目に見えてお客さんの数が増えていたので危ないなど感じていた。目のまえの売上はもちろん大事だが、店を長く続けるためにはその地での信用がもっとも大切なことである。店から感染者を出してしまえば、その先そこで商売が続けられるかはわからない。店を開けるといことは、暗にきてくださいとメッセージを発していることでもあり、そのときわたしは、店に来ようとするお客さんには家にてほしかったのだ。

もちろん書店にいき本を買うことが日常となっている人もいるし、店には雑誌の定期購読や注文している本を取りにくる人もいる。わたしの店では本の通販も行っており、その作業で毎日店には来ていたので(この期間、注文は通常の7倍に増えていた)、休業中でも希望されるかたには店内に入っただき、自由に本を選んでもらった。「本棚を眺めているだけで、なんだか気持ちが落ち着いてきました」。ある男性が帰り際そう話してくれたが、うす暗い店内で本棚を見つめる人の真剣なまなざしは、人はパンのみでは生きられないということを改めて思い起こさせるものだった。

わたしの店は夫婦二人でやっており、家賃もそう高くはない小商いなので、休業という判断がすぐできたのだと思う。白か黒かで物事を決めずすみ、このときほど個人営業をありがたく思ったことはない。ぼんやりと見えてきた今後については、また次回。(辻山 良雄)

東京文化会館 音楽資料室を訪ねて

(画像提供：東京文化会館)

「東京にオペラやバレエも出来る本格的な音楽ホールを」と、東京都の開都 500 年事業として建設され、1961 年に開館した東京文化会館。JR 上野駅の公園口を出てすぐの、コンクリートのひさしが印象的なその建物は、建築家・前川國男氏の設計によるものです。

その4階に、国内でも数少ない音楽専門の図書館があり、クラシック音楽を中心に、民族音楽、邦楽、舞踊などの資料を閲覧・視聴することができます。

この度の新型コロナウイルス感染拡大の緊急事態宣言を受けて、休館されていましたが、施設内でいち早く再開され、お邪魔させていただくことができました。音楽資料室に勤められて今年で14年目という篠原さんに、お話をうかがいました。

1 音楽資料室の概要

クラシック音楽を中心とした図書、雑誌、楽譜、視聴覚資料のほか、東京文化会館で行われた公演のプログラムを所蔵しています。中学生以上の方はどなたでも無料で閲覧・視聴することができ、小学生も保護者同伴であれば利用できるそうです。

所蔵資料は約 133,700 点で、内訳は以下のようになります (2020 年 3 月末現在)。

- ・音源資料：75,212 枚 (LP 39,117 枚)
(CD 36,095 枚)
- ・映像資料：4,570 枚 (LD・VHD 1,832 枚)
(DVD 2,738 枚)
- ・楽譜：34,127 冊
- ・図書：20,822 冊
- ・音楽雑誌：690 タイトル (和雑誌 620 タイトル)
(洋雑誌 70 タイトル)
- ・東京文化会館公演プログラム 1961 年 4 月～

この中で、開架は図書と雑誌の一部のみで、所蔵資料の多くは書庫に収蔵されています。利用者は、室内の端末やカード目録やファイルで、もしくは事前にインターネットで、閲覧・視聴したい資料の請求番号を調べ、カウンターで資料を出し

てもらえます。手書きのカード目録は今も現役で、目録棚がずらりと並んでいます。特にレコードは目録をデータ入力するようになってからは資料の受入がないため、カードのみで今も運用されているのだそうです。

資料室は、入って右手に閲覧室、右奥に視聴室があり、楽譜や図書を閲覧したり、レコードや CD を聴いたり DVD を視聴したりできます。資料の館外貸出はされていませんが、部屋の一面が窓の、明るく気持ちのよい空間で調べ物をしたり視聴したりできます。視聴室には、各机にレコードや VHD などの再生機器が設置されていました。

閲覧室の横は受付カウンターがあり、その先に開架の書架が並びます。音楽に関する書籍が広く収集されており、民俗芸能や邦楽に関する書籍なども充実していました。音大の過去問題集も所蔵されているので、受験生が閲覧やコピーに訪れることも多いのだそうです。

2 よく整理された書庫には

受付カウンターの奥にある書庫も拝見させていただきました。整然と並んだ棚には、CD、DVD、レコード、楽譜などがぎっしりと並んでいます。その中でも、ボリューム感があつたのは、さまざまな楽譜の棚です。ロシア語やイタリア語の背表紙も多く、分類記号も CM (室内楽)、SE (声楽)、SP (Score and parts = オーケストラ・パート譜) などと、興味深かったです。独自分類に基づいて分類しているのだそうです。楽譜は、それぞれ「その作曲家だったらこの版元が第一」とされるような資料を購入されていて、その出版社が廃業するなどで再び入手できなくなってしまった、貴重なものもあるとのことでした。

東京都内で活動するアマチュアの演奏団体に、オーケストラ・吹奏楽用のパート譜の館外貸出を行うサービスもあり、毎年継続して利用する団体も多いそうです。さまざまな曲に挑戦できる機会

が与えられるというのは、ありがたいですね。

ほとんどの資料は、ジャンル別、作曲家別に整理されている中、レコードだけが受入順に収蔵されているのは、面白く思いました。「A1.1」が付せられた受入



1号は、ロシアのヴァイオリニスト、レオニード・コーガン演奏のラロの「スペイン交響曲」。音楽資料室の資料購入の歴史が一覧出来、その年その年にどんなレコードが発売されていたかを知ることが出来るのではと興味深かったです。

なお、東京文化会館の開館当初からの公演プログラムを保存されているのは、文化会館が擁する資料室ならではの、とても貴重なコレクションです。



寄贈などの受入には現在には応じていないそうです。美しく整理された資料庫も、日々の丹精によるものと納得しました。

3 日々の仕事

現在、感染症拡大防止のため、開室の日時を制限されていますが、通常の開室は毎週月曜日と不定期の休室日を除く毎日で、時間は11時半から18時半（土日祝は17時）までです。日々、窓口業務（利用者の受付や資料請求の対応）を派遣スタッフが、レファレンスや電話対応、資料整備は司書4名で対応されているそうです。

電話でも受け付けているレファレンスでは、専門的で資料探しや確認に時間を要する問い合わせも多いと聞きました。篠原さんも、勤められた当初は、専門用語の多さや多言語の資料に苦心されたそうです。時には、手元の資料の中に探さきれずに、利用者の方の期待に応えられないこともあると話してくれた篠原さんから、丁寧にそして熱意を持って対応されている様子が伝わってきました。

また、機材の修理や点検などは、定期的に業者をお願いしているそうですが、レコードのクリーニングやCDを磨いての修復などは、内部でされているそうです。音源の視聴を利用される方々からは、さまざまなリクエストもあると聞きました。

さらに、資料の購入も、ジャンルを分担して選定からされています。CDやDVDは、月刊誌『レコード芸術』（音楽之友社）の新譜批評などを参考に、広く利用価値があるものを選ぶように心がけているそうです。所蔵資料は、購入によるものが中心で、

4 魅力ある資料室をさらに活用してもらうために

多くの方に気軽に資料室を活用してもらえよう、「資料室だより」を発行したり、文化会館入り口の総合カウンターに設けた小さな「音楽資料室展示コーナー」で資料を展示したりと、さまざまな発信活動もされています。インターネットでの資料検索も、大学や国会図書館と連携した蔵書検索、東京文化会館の過去の公演情報を検索できる「東京文化会館アーカイブ」など、充実しています。

今は、インターネット配信などでより簡単に好きな音楽が聴けるようになりましたが、楽譜を見ながらレコードやCDを視聴したり、昔のレコードのジャケットやコンサートプログラムを閲覧したり、音楽資料室でアナログの魅力を体感してほしいと篠原さんはおっしゃっています。私も実際に見せていただきましたが、昔の公演プログラムやレコードジャケットは、作る人の熱量が伝わってくるような、見ごたえのあるものばかり。オペラの日本語訳や、演奏家や曲についての情報、写真やデザインなど、見る人によって、さまざまな魅力を発見できると思いました。

東京文化会館に、コンサートの開演を待つ人々の熱気が戻るのが待ち遠しいですね。上野の杜にお出かけの際は、ぜひお立ち寄りいただきたいです。（LAS探検隊）

心の何処かで私を支える本

溝上 牧子

かなり前のことになるが、ある日、朝日新聞の記事を持って来て同僚が、「この記事のこの部分読んでみて」と言った。読んでみると、その記事を書いた人がどこかで聞いたエピソードについて書いていた。内容はこうだ。ある時、アメリカの老富豪が「全財産をはたいてもかなえない望みはありますか」と聞かれて、こう答えたとある。「大好きな『ハックルベリー・フィンの冒険』をまだ読んでいない状態に戻してほしい」と。なぜそういう自分に戻りたいのか？そこにはこう書いてあった。(抜粋)——想像するに、富豪は多感な時期に夢中で読んだのだろう。大人になっても読み返すたびに面白いが、初めて読んだあの興奮は戻らない。願わくはもう一度、まっさらになって読んでみたい——。(朝日新聞 10/27 付朝刊) そんな一冊のある人は幸せだと思う。と私は書いて記事の文章にもどったらこの記事を書いた記者も同じ事を書いていた。

友人である同僚に「〇〇ちゃんはそういう本ある？」と質問され考えた。あるだろうかそんな本が。少し考えるが思いつく本がみつけれない。「そういう本は残念ながらない」と答えた。逆に彼女にも同じ質問をしたが「ないなあ」という。

面白い本をワクワクしながら読む体験は独特な喜びをもたらすが、話をしながら私は一度の喜びにはそう興味がなく、寧ろ出合えたことを喜び。繰り返し楽しめる性分だったと気づく。好きなものは、何度読んでもその感動が蘇るのだ。

考えるうちに、自分自身に大きく影響を与えてくれた本ならあるなと思った。高校時代に読んだミヒャエル・エンデの『モモ』(大島かおり/訳 岩波書店)がそうだ。時間というものの価値が、様々に変化するものだという。その奥に潜む人の感情のようなものが、当時の私の心の琴線にふれ、何十年たった今も大切に思っているようなところがある。学生時代、誕生日に当時の班で一緒だった級友たちにねだって買ってもらった、本の見返しに級友たちからのメッセージが書かれた

『モモ』が今も手元にある。そんなことを考えていた時、SNSでミヒャエル・エンデの誕生日を知った。1929年11月12日生まれ。子どもの頃、読む本の著者とか、誕生日とか経歴とか、出版社の名前とかそんなに気にしたことはなかったように思う。このタイミングで誕生日を知ったので、ミヒャエル・エンデについてちょっとネットで検索してみた。するとエンデは、彼の本も翻訳している佐藤真理子さんと結婚していたのだと知ってびっくりした。本でしか知らないエンデが急に近い存在になったような気がした。日本人の女性と彼が結婚していたなんて。1度目の結婚は女優と。彼女は早くに病死してしまった。佐藤との結婚は2度目の結婚でいずれも子どもはいない。その2つの結婚がエンデにとって幸せであったらいいなと思う。

さて、話しは戻るが、最初に書かれたような読書体験がある人は多くないかもしれないけれど、に残る本というのは誰しも何冊かもっているものではないだろうか。心揺さぶるものに出合い何かを始めるきっかけをくれたり、何かの道を発見したりするような経験を…読書に限らず、歌、人の姿、物などから常に人生はなにか影響を受けている。意図して人の心を動かすことはできないけれど、その中に嘘がない言葉や行動には、文章にしろ、しゃべる言葉にしろ、人はなにかしらを受け取るのではないか。上手い下手のテクニックではない何かを。そこにある「その何か」が人のこころを揺さぶるのではないかと思うのである。

だから大富豪のおじいさんに会ったら言いたい。お金を積んでもかなわないからこそ、その「時」の大切さがわかるのではないかと。そして何度でもその好きだった本を読んだらいいと。

でもきつとおじいさんは、お金を積んでも手に入らないからこそ、あえてそう言ったのかもしれない。そうできないことを心から楽しむように。

(みぞか みまきこ:朔北社)

図書館を離れて (第47回)

— 「いく」と「ゆく」② —

並木せつ子

石井桃子の本で「ゆく」という言葉の存在を意識してから、それ以外の人も「ゆく」を使っているのだろうか、気になってしかたない。須賀敦子は、石牟礼道子は、武田百合子は……、と次から次へ名まえが浮かぶ。とりあえず身の回りにある本を、やみくもに取り出して読み始めた。否、読んでいると言葉を見落としてしまうので、ひたすら字面を追っていったのである。

10冊ほど選んでメモをとりながら見ていくと、人それぞれに「いく」「ゆく」「行く」、異なった使い方をしていることがわかった。気がつくとな無作為に棚から取り出したつもりが、偶然にも著者はすべて女性だった。こうなったら、他の女性の本も見ていこうと思いつき立ち随筆を中心に集めてみた。幅広い年代からということだけを考慮して選んだ結果、文学者が多くなってしまったが、明治生まれから戦後生まれの女性44人の本が集まった。言葉を追いかけていくと、精確ではないけれど傾向らしきものが見えてきたのである。

前回、「いく・ゆく」の意味は詳細にみると「進行・移動する」「通過する」「物事が進行する」「成長する」「満足する」の他いくつもあるが、大雑把には、目に見える場所的な移動か、目に見えない時間的な経過かに分けることもできそうだと書いた。この辺の使い分けを含め、どのように使われているか、生まれた年代順に見ていきたいと思う。

明治生まれ

野上弥生子(1885年生)は《白山から曙町へ向って行く》《逢って行かない》《決定するわけには行かない》のように、場所的移動の場合も時間的経過の場合も、意味に関わりなくすべて漢字の「行く」だけで、「いく」「ゆく」というひらがなは使っていない。

壺井栄(1899年生)は《あやまりに行かぬ日がない》《娘らしさに近づいてゆく》《野原のはずれ

を少しゆく》など、漢字の「行く」とひらがなの「ゆく」を使っている。

宮本百合子(1889年生)も壺井と同じく、《行雄のところへ行き》《自身の世界を作って行く》《忙しくなるとゆく》と、「行く」と「ゆく」が混在している。

幸田文(1904年生)は野上と同じで、《井戸端へ持って行く》《なまけるわけには行かなくなった》のように、すべて漢字の「行く」である。

石井桃子(1907年生)は《墓まいりにゆく》《年をとってゆく》《彼のそばまでいき》のように、漢字の「行く」は使わず、「ゆく」と「いく」の両方を使っている。数は「ゆく」が圧倒的に多い。《ゆきに通っていく》という文がある。これは往復の「往」の意味で「ゆき」、移動の意味で「いく」を使っているので、二つの言葉を意識的に使い分けているのかもしれないが、どのような基準なのか全体を捉えることはできなかった。

沢村貞子(1908年生)は《外務省には行かない》《誠実に生きてゆきたかった》のように、漢字の「行く」とひらがなの「ゆく」を使っている。

明治生まれの6人のうち、野上弥生子と幸田文は漢字の「行く」のみ。壺井栄、宮本百合子、沢村貞子は「行く」と「ゆく」が混在。石井桃子は「ゆく」と「いく」が混在で、明治生まれはひらがなの「いく」の使用率が非常に低い。また2種類を使っている人が、どう使い分けているのか明確な答えは見つからなかったが、「行く」と「ゆく」の場合、場所的移動の意味の方に「行く」を使うことが多いという傾向はあった。

幸田文までの4人は漢字を多用しているだけではなく、《成長して行った》(壺井)《まきこまれて行った》(宮本)《死んで行った》(幸田)の「行った」のように、今だったらひらがなにする所に漢字を使っている例が随所に見受けられる。《両方やって見てよい方にするがよい。やって見ないでは、……決定するわけには行かない》(野上)の「やって見る」も同様で、こういう点は大正時代になってから小学校に入学した石井、沢村と趣を異にしている。幸田は小学校生活の大半を大正時代に過ごしているのに先の3人に近いのは、露伴の影響があったからだろうか。(なみき せつこ)

カイツブリと気候変動

梅雨入り前、全国の大小の河川や湖沼では、カイツブリの子育てが始まります。カイツブリは本州以南ではどこでも見られる留鳥で、コガモより小さく尾羽が非常に短く、小粒なその丸っこい姿は昔から人々に親しまれてきました。主に淡水域に生息しますが、波静かな港湾や内海に出ることもあります。

カイツブリの仲間（カイツブリ科）は世界に6属約20種が現存し、日本には留鳥のカイツブリ属1種（亜種カイツブリと南大東島の亜種ダイトウカイツブリの2亜種）と多くが冬鳥として渡来するカンムリカイツブリ属のカンムリカイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリ、アカエリカイツブリの4種が生息します。

カイツブリは他種に比べて一番小さく全長約26cm。4～7月が繁殖期で、池沼や流れのゆるやかな川の水草の間に浮巢を作り、キリキリキリキリと甲高い声で鳴き、警戒してピッピッと鋭い声を出すこともあります。年1～3回、4～6個の白い卵を産み、雌雄交代で温め、巢を離れるとき水草などで卵をかくす習性がよく知られています。

カイツブリの特性はよく潜水することで、普通一回15秒前後で30秒くらいまで潜り、小魚や水生昆虫などを捕食します。また危急時にはくちばしだけ水面に出して隠れ続け、またひなを背に羽根で抑えて「潜水母艦」になるともいわれます。

関東地方でも5月下旬から夏場にかけて浮巢での子育てに関心が集まり、東京の井の頭公園の池や川越市の伊佐沼など各地の池や沼で浮巢のひなに餌を運ぶ親鳥や親鳥の背に乗るひなのかわいい動画がウェブサイトに掲載されています。

なかでも貞享4年（1687年）に松尾芭蕉が「五月雨に鳩の浮巢を見に行む」（「あつめ句」）と詠んだ滋賀県の琵琶湖は、古くからカイツブリの浮巢がシンボルで「鳩の海」と呼ばれ、現在、琵琶湖はラムサール条約湿地に登録され、国際的にも重要な水鳥保護の湖で、特にそのヨシ帯は琵琶湖の

原風景をとどめ、カイツブリの安住の地になってきました。

琵琶湖は1990年代から水草が大量に繁茂して水の流れが停滞、水質の悪化が問題になってきましたが、2018年の21号台風で琵琶湖南部の南湖面積の約7割の約35㎏にわたり水草が流失し、水草が減り水質悪化の恐れが報じられました。水草の減少や水質悪化はカイツブリのほか湖に生息する魚類などの生態系に大きく影響します。

琵琶湖には1980年代にはカイツブリが2000羽超いましたが、2004～2012年度の調査では500羽から800羽台を上下し、滋賀県のレッドデータブックで希少種に指定されました。2017年の繁殖期4～8月での県立琵琶湖博物館と市民調査員による琵琶湖や周辺の河川や池沼の調査で、286地点のうち145地点で計566羽を確認しました。そのうち琵琶湖での確認は130羽で、その3倍以上の432羽が琵琶湖以外の内陸部の池や沼という結果でした。（毎日新聞2018年1月19日）。

この琵琶湖のカイツブリの減少の原因として、護岸整備や営巣地となるヨシ帯の減少、水質変化、ひなを襲う外来魚の増加、加えて異常気象による水草の減少がこれに拍車をかけることが指摘されています。同じようなことは日本全国の湖沼や河川でも言え、毎年のように日本各地を襲う猛烈な台風や記録的な大雨が行き場を無くしたカイツブリを脅かしているのではないかと考えられます。

歴史に息づく鳩鳥

カイツブリは日本の文献では、古事記「中巻-仲哀」に「鳩鳥（にほどり 暹本杼理）の淡海あふみの海」、同じく「中巻-応神」に「鳩鳥（みほどり 美本杼理）の潜かづき息づき」とあり、「にほ」と「みほ」の二つの呼称で登場します。万葉集での鳩鳥の出現は多く、大伴坂上郎女が天皇に献じた歌「にほ鳥の潜かづく池水こころ情あらば君にわが恋こころふる情示さね」（万葉集巻第四）、山上憶良の長歌（同巻第五雑歌）のなかの「鳩鳥の二人並び居ふみとくにひと語りひし」の一句、また史国人の一首「鳩

鳥の息長川は絶えぬとも君に語らむ言尽きめやも」
(同巻二十)に見られるように、カイツブリの雌雄
がよく顔を見合わせ、一息ついてまたすぐ潜る生
態から、「池水」「男女の語らい」「息長い」の枕詞
として出揃い、王朝時代にカイツブリが男女の愛
の舞台に浮上しています。

興味深いのは、万葉集「東歌」にある「鴉鳥の
葛飾早稲を饗すともその愛しきを外に立てめやも」
(同巻十四)という新嘗の祭りの日の歌です。こ
の祭りは東国農民の間で行われていた新米で神を

もてなす民間行事で、男性は家の外に出され女性
だけで行われたそうですが、そのタブーを破って
愛する夫を家の中に入れようという女性の歌です
(佐佐木幸綱著『万葉集東歌』／東京新聞出版社／
1982)。「鴉鳥」は水に「潜く」ことから「葛飾(か
づしか)」にかかる枕詞で、「葛飾」は武蔵野国と
下総国の江戸川流域を広くいった地名です。鴉鳥
が単なる枕詞をこえて愛情深い鳥として東国の農
民に受け入れられていたとしたいものです。

(ためさだ さだと:さいたま市図書館友の会)